研究報告

認知症カフェへの参加経験が作業療法学生に与える影響

－SCATを用いたデプスインタビューの分析を通して－

The Effect of Participation in Dementia Cafes on Occupational Therapy Students

：Analysis of Depth Interviews using the SCAT method

戸　田　祐　子[1)]・加　藤　伸　司[2)]・齋　藤　佑　樹[1)]
TODA Yuko,　KATO Shinji,　SAITO Yuki

キーワード：認知症カフェ，作業療法学生，Step for Coding and Theorization（SCAT）
Key words：Dementia Cafe,Occupational Therapy Student,Step for Coding and Theorization（SCAT）

要　旨

本研究の目的は、学内の認知症教育における課題の抽出や、今後の教育改善への示唆を得るため、認知症カフェへの参加経験が作業療法学生に与える影響について記述し考察を加えることである。認知症カフェでのボランティアを経験した学生３名を対象に、デプスインタビューを実施し、Step for Coding and Theorization（SCAT）を用いて分析を行った。結果、認知症カフェへの参加経験は、学生が偏見や先入観を排除し、中立的態度で当事者と向き合うことの重要性への気づきを与えるなど、認知症者に対して抱く偏ったイメージの修正に寄与していた。

Abstract

The purpose of this study was to identify issues in dementia education within theuniversity and to obtain suggestions for future educational improvement. Therefore, describe and consider the effect of participation experience in the dementia cafeon occupational therapy students.

For data analysis, Step for Coding and Theorization（SCAT）was used to describethe storyline and theory. As a result, the experience of participating in the dementiacafe gave students an awareness of the importance of eliminating prejudice andprejudice and facing the parties in a neutral manner. It also contributed to thecorrection of the negative image of people with dementia.

１）仙台青葉学院短期大学　Sendai Seiyo Gakuin College
２）東北福祉大学　Tohoku Fukushi University
受理日：2022年1月31日

緒　言

本研究の背景

我が国の高齢者人口は2020年9月時点で過去最多の3617万人となり、全人口の28.7％を占めている［1］。認知症を有する者は2012年には462万人であったが、2025年には730万人になると推計［2］されており、作業療法学生が臨床実習で認知症者を担当する、あるいは認知症者に接する機会がさらに増えてくることが予想される。

看護学生を対象とした研究では、学生は、身体的･精神的能力に注目する教育を受けているため、高齢者や認知症高齢者に対して、身体・認知機能が衰えた弱い存在といった否定的なイメージで捉える傾向があるとされる［3］。特に低学年でこの傾向は強いとされ、その理由には、マスメディアの影響や近親の認知症高齢者との関わりが影響していることがわかっている［3］［4］。また、このような、身体的・精神的能力を低く評価する傾向は、Patronizing communication［5］の助長につながり、認知症者と支援者の意思疎通の質を低下させる。

これらのことからも、卒前教育においては、認知症の病態や症状、治療法等に対する知識を付与するだけでなく、まず認知症や認知症者に対する否定的なイメージや偏見を持たないような教育の工夫を行うことが重要といえる。

棚﨑ら［6］［7］は､看護学生はグループホームでの実習で認知症高齢者と直接的な関わりを通して、認知症高齢者を一個人の存在として尊敬の念をもって捉えようとした結果、認知症高齢者のイメージが肯定的に変化したと報告しており、認知症者と直接関わる経験は、学生の認知症や認知症者に対するイメージの肯定的な変化をもたらす可能性がある。また井村ら［8］は、理学・作業療法学生に対する調査研究を通して、認知症者との「関わりの頻度」「関心の程度」「知識量」「イメージ」が認知症に対する肯定的態度に影響することを報告している。

現在、本学のカリキュラムでは、1・2年次開講の5科目（表1）にて認知症について学修する機会を設けているが、認知症者と直接的に関わる機会はない。そこで2019年度より、認知症教育の一環として、学生の認知症カフェでのボランティアを実施している。

本研究の目的と意義

本研究の目的は、認知症カフェへの参加を通して、認知症者との接触体験をした学生の変化について記述し考察を加えることである。この過程は、本学における認知症教育の改善に向けた有益な視点を提供すると考える。

表1．認知症に関する授業の概要

科目名	年次	回数	授業の概要（認知症に関連した授業回数）
臨床作業療法学演習Ⅰ	1	30	臨床現場で関わる頻度の多い疾患について，演習を通して一連の作業療法過程について学修する．(5回)
精神医学各論	2	15	作業療法対象疾患の病因，診断，治療について系統的に学修する．(5回)
疾患別作業療法評価学実習Ⅱ	2	22	実習を通して，精神疾患，高齢期に多い疾患の病態を理解し，各検査･測定の基本的な実施方法，手順の理論的根拠を学び，的確に実施できるよう技術を身につける．(6回)
病期別作業療法学実習Ⅲ	2	22	認知･精神機能障害などに起因する疾患の病態を理解するとともに，対象者の状態･病期に合わせた作業療法の治療原理，指導，援助方法について実習を通して学修する．(4回)
臨床作業療法演習Ⅱ	2	30	臨床現場で関わる疾患について，演習を通して一連の作業療法過程について学修する．各疾患の症候をもとに障害像を理解し，評価の選択から結果の解釈，治療へのつながりまでを学修する．(4回)

認知症カフェとは

認知症カフェは、オランダのアルツハイマーカフェから始まり、日本では2015年に認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）［9］によって認知症カフェが広まった。認知症当事者やその家族、知人、医療やケアの専門職、そして認知症について関心のある人が気軽に集まり、和やかな雰囲気のもとで交流を楽しむ場所である。オレンジカフェ等の名称で呼ばれることもあり、社会福祉協議会等が主催で運営されている。今回学生が参加した認知症カフェは、宮城県作業療法士会、仙台市薬剤師会が運営母体となり、2015年４月より、月１回（13時から15時の２時間）の頻度で活動を継続している。参加者同士の語り合いや専門職による相談や講話、介護の工夫や体験談の共有など、認知症当事者やその家族だけでなく、認知症に興味・関心のある地域住民も集える場を提供している。

方　法

１）対象者

本研究は、認知症カフェへの参加経験が、作業療法学生へ与える影響について検討することを目的としているため、同質サンプリングを行った。仙台青葉学院短期大学リハビリテーション学科作業療法学専攻の１・２年生の中で、2019年に仙台市で開催された認知症カフェに参加した学生８名に対し、筆頭著者が研究の目的と概要について概説し、参加を希望した３名を対象とした。参加学生の認知症カフェ参加前の認知症者に対するイメージについて表２に示す。

なお、本研究は、仙台青葉学院短期大学研究倫理審査委員会での承認を得て実施した（承認番号0105）。筆頭著者は、対象学生に対して成績判定者の立場を有するため、すべての対象者に対して、ヘルシンキ宣言に則り研究内容について十分に説明し、同意を得たうえで実施した。

２）データ収集

インタビューは、他の対象者の考えや意見に左右されない深層面接法（depth interview：以下.DI）を採用した。インタビュアーは、事前に質的研究に精通している研究分担者に指導を受けた筆頭著者が担当した。インタビュー内容は、本研究の目的に添って作成したインタビューガイド（表３）を用いた。インタビューの内容は、学生の同意を得たうえでICレコーダーを用いて記録した。認知症カフェ参加日とDI実施日を表４に示す。なお、本研究の実施および報告に際しては、インタビューに特化した質的研究報告の統合基準チェックリスト（Consolidated Criteria for Reporting Qualitative Research（COREQ）checklist）［10］に準拠した。

表２．認知症カフェ参加前の学生の認知症者に対するイメージ

A	曾祖父，曾祖母が認知症になってから，怒鳴るなどの人格変化を目の当たりにし恐怖心が強い．
B	曾祖父が認知症になってから，物忘れが多くなり，私のことも忘れてしまった．受け入れてはいる．
C	祖父の兄弟が認知症．受け入れてはいるが，進行に伴って身内のこともわからなくなり悲しい．

表３．インタビューガイド

① 認知症カフェに参加するきっかけ，動機についてお話ください．

② 認知症カフェでの体験を通して，認知症あるいは認知症当事者に対して抱いた印象についてお話しください．エピソードとともにできるだけ具体的にお話ください．

③ 認知症カフェに参加する際に，どのようなことを意識して臨んだのか教えてください．

④ 認知症カフェで，認知症当事者のご家族の思いや認知症当事者の思いを聞く中でどのようなことを感じましたか？また，どのようなことを意識して臨んだのか教えてください．

⑤ 今回の参加を通して，今後認知症者に対して，学生として何かできると思ったことはありますか？またそう思った理由を教えてください．

表４．学生の認知症カフェ参加回数とDI実施日

学生	学年	認知症カフェ参加日	DI実施日（時間）
A	2	2019. 7. 13	2019. 11. 13（32分18秒）
B	2	2019. 7. 13, 12. 14	2019. 12. 19（8分8秒）
C	1	2019. 9. 14, 12. 14	2019. 12. 20（11分8秒）

３）分析方法

インタビューで得られたデータは、大谷が考案したSteps for Coding and Theorization（以下SCAT）［11］を用いて分析した。SCATは小規模な質的データの分析にも適用可能な分析手法である。これは、言語データをセグメント化し、〈１〉セグメント内の注目すべき語句、〈２〉それを言い換えるデータ外の語句、〈３〉それを説明するための語句、〈４〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順に４つのステップコーディングを行い、それをもとにストーリーラインの記述、理論記述を行うものである。

本研究では、研究目的に照らして、学生の認知症カフェ参加前後の変化、そして変化が生じた理由に焦点を当て分析を行った。

結　果

逐語録から作成した35セグメント（学生Ａ：12、学生Ｂ：14、学生Ｃ：10）について、SCATによる分析を実施後（図１）、ストーリーラインとして以下のように記述（下線部は〈４〉で付したテーマ・構成概念を示す）するとともに、ストーリーラインを断片化、および統合して理論記述を行った（表５）。

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
1	面接者	認知症カフェの参加回数と認知症カフェに参加するきっかけ				
2	E	参加は1回。教員から認知症カフェがあるよ、参加する人～って声がかかったから。将来認知症に関する何かに今回参加していたら何か役に立つかな～って思ってやってみようって思いました。	教員/声がかかった/将来/認知症/何か/参加していたら/役に立つかな/やってみよう/思いました	指導者/誘い/キャリア/認知症者との関わり/有益な経験/不確定な期待/動機付け	教員の誘い/認知症者との関わりに有益な経験/結果予期/動機の賦活	教員の誘いを契機とした認知症カフェへの参加/今後の認知症者との関わり/有益な経験となる予期
3	面接者	認知症カフェの経験を通しどのようなイメージを抱いたか				
4	E	認知症カフェっていう言葉を参加するまで知らなかった。認知症の当事者の方と、家族の方が集まって情報交換みたいなことする場所って。でも行ってみたら違ってた。作業やりながらなんか、「どっからきたの～？」みたいな自由な会話が多かった。女性が多くて年配の方が多かった。認知症の人だけじゃないのかな？認知症当事者かな？っていう人はいた。参加者は20人くらいと多かった。	知らなかった/当事者の方/家族/情報交換/自由な会話/女性が多くて/年配の方/多かった	存在自体を知らなかった/認知症者/介護者/支援者/女性優位の参加者層/高齢者優位の参加者層	未知のコミュニティ/当事者研究様/女性や高齢者の拠り所	当事者研究的な要素を帯びた女性や高齢者の多い未知のコミュニティ
5	面接者	認知症に対するイメージ				
6	E	パッとっていっていいのかわからないけど、みんなでワイワイいたらわかんないのかなって思った。言われて「あ、そうだったんだ」みたいなことが多くて、なんかすごく徘徊がすごいとかニュースですごく行方不明になったとかきくので、なんかそんな印象が強かったんですけど、全然そんなこともなくて。なんか麻痺あんのかなぁ？って感じたくらいで一緒だって。　お母さんのおばあちゃんってなんていうのかな？親戚ですかね？ひいばあちゃんが80なんぼだったんですけど、忘れっぽくてなんか、「誰だ～？」ってことが多くて。暴力的だったことを見たことで、やっぱりちょっと印象が強かった。小学校とか中学校の頃。小学校の低学年のころは一緒に遊んでくれたりしていたので、急に変わるとやっぱりなんか衝撃的だった。ずっと覚えてた。　じいちゃんも脳梗塞やって失語になって老人ホームとかに行くと、わ～っと話しかけられたりして。今もうでもないですけど、怖いなぁって思っていました。	みんなでワイワイいたらわかんない/「あっそうだったんだ」/徘徊がすごいとか/ニュース/きく/印象が強かった/全然そんなこともなくて/一緒だって/親戚/暴力的/見た/印象が強かった/低学年の頃は/遊んでくれたりした/急に変わると/衝撃的/ずっと覚えてた/怖いなぁ	見分けがつかない/本当に？/認知症の症状/世間のイメージ/思い込み/全く異なる/健常者と同じ/親しい人/攻撃的な態度/経験/刷り込まれた印象/昔/幼少期/良い関係/唐突な変化/インパクト/忘れられない/恐怖	ごく普通/一般的な認知症者のイメージからくる思い込み/想像と現実のギャップ/幼少期の忘れられない経験/認知症発症による親しい人の変化/恐怖体験	一般的なイメージや過去の経験から刷り込まれた認知症者に対する偏ったイメージからの脱却
7	面接者	認知症カフェに参加する際、意識したこと				
8	E	初めて参加した人で奥さんが話しかけて黙々とやる人で、奥さんの話を聞くので精いっぱいだった。聞き入っちゃった。礼儀正しくしておこうって感じでした。	礼儀正しくしておこう	失礼のないように	場をわきまえた態度	学生の立場をわきまえた関わり
9	面接者	認知症カフェでどんなことを学んだか、気づいたか				
10	E	怖いって決めつけるんじゃなくて、認知症の人でも話しかけるっていうか、なんていうんでしょう？すみません。えと、うちが参加した時がポプリをつくろうっていう日で、折り紙がうまくできなくて二人で悩んでいた時に、黙々と取り組んでいる当事者に、ちゃんと教えることをしていて、ちゃんと向き合うのが大切、貸してっていうんじゃなく、その人ができるように教えてた。でも、奥さんが「こうやるんだよ！」ってとりあげて折ってて、なんかそれもいいと思うけど自分でやった方が頭も働くしいいとおもった。奥さんが取り上げても怒ることもなく静かな人だった。クロスワードやっているときに、他の人が難しくてわからないなって言ってたけど、どんどん説いていたので教員でもしていたのかな？って勝手に思っていた。緊張してて確認はできなかった。	決めつけるんじゃなくて/ちゃんと向き合う/大切/その人/できるように教えてた	思い込み/良くない/目の前の人をそのまま見ることの大切さ/当事者/能力を発揮できるような関わり	先入観/否定/排除/非建設的/中立的構え/中立的態度/重要性/認知症者/潜在能力を引き出すことができる支援	先入観を排除し中立的態度で認知症者と向き合うことの重要性/認知症者が潜在能力を発揮できるような支援
11	面接者	そう思った理由は何か				
12	E	奥さんがやってあげるのもいいと思うけど自分でやった方が頭も働くしいいとおもった	自分でやった方が/頭も働く/いいと思った	頼らずにやる/認知機能の賦活/効果的な印象	主体的な作業遂行/認知機能の改善/機能回復/効果的な印象	主体的な作業参加による認知機能の改善への寄与

図１．SCAT 分析の例

ストーリーライン

1）学生Aのストーリーライン

認知症カフェという当事者研究的な要素を帯びた女性や高齢者の多い未知のコミュニティへの参加は、一般的なイメージや過去の経験から刷り込まれた認知症者に対する偏ったイメージからの脱却の契機となっていた。認知症カフェでの当事者と関わる経験を通して、認知症者に対する先入観を排除し中立的態度で認知症者と向き合うことの重要性を実感していた。また、過度な介入を行うのではなく、認知症者が潜在能力を発揮できるように支援を行う重要性についても実感していたが、その理由を確認すると、主体的な作業参加による認知機能の改善への寄与といった、機能回復への関心が基盤となっていた。

2）学生Bのストーリーライン

学生は、認知症カフェへの参加を通して、全人的支援の必要性や、伝わりやすいコミュニケーション方法を採用する重要性を感じた。今回学生は、参加に際して、偏見を排除した関わりを意識していた。先入観を排除した関わりは相互に有意義であることを実感したが、授業で築かれたイメージよりも能力の高い認知症者との関わりを通して、学内授業で学んだ専門知識によって構築された認知症像との相違を実感し、当事者との関わりが無い中で学習できることの限界や、当事者と直接関わることの重要性を感じた。これは、認知症者以外にも当てはまる問題であり、学内の授業においても、当事者と関わる機会の設定により、問題点を中心とした学校教育がもたらす偏見からの脱却ができると考えた。

3）学生Cのストーリーライン

学生は、マスコミが流布する偏った情報等から、認知症者に対して、何も分からなくなる病気という思い込みをもっていた。しかし認知症カフェで、当事者との接触体験による認知症者の辛く苦しい回想談を聞いたり、認知症者が不可逆的疾患を抱えながら前向きに生きる様子を観たりすることにより、当事者への敬意を持った。また、不可逆的でありながらも進行の抑制は可能であることや、認知症を抱えながらもより良く生きることができる可能性の実感を通して、認知症カフェ参加以前に抱いていた思い込みからの脱却をはたすととも

表5．ストーリーラインを断片化した理論記述

理論記述（今回の分析で言えること）
▶ 学当事者との関わりが無い中で学習できることの限界や，当事者と直接関わることの重要性を感じた．学生は，マスコミが流布する偏った情報等から，認知症者に対して，何も分からなくなる病気という思い込みをもっている．
▶ 学生は，認知症カフェへの参加に際して，偏見を排除した関わりを意識する．
▶ 認知症カフェという当事者研究的な要素を帯びた女性や高齢者の多い未知のコミュニティへの参加は，一般的なイメージや過去の経験から刷り込まれた認知症者に対する偏ったイメージからの脱却の契機となる．
▶ 学生は，不可逆的でありながらも進行の抑制は可能であることや，認知症を抱えながらもより良く生きることができる可能性の実感を通して，認知症カフェ参加以前に抱いていた思い込みからの脱却をはたす．
▶ 学生は，認知症カフェで，当事者との接触体験による認知症者の辛く苦しい回相談を聞いたり，認知症者が不可逆的疾患を抱えながら前向きに生きる様子を観たりすることにより，当事者への敬意を持つ．
▶ 認知症カフェで当事者に関わる経験は，認知症者に対する先入観を排除し中立的態度で認知症者と向き合うことの重要性を実感する．
▶ 学生は，認知症カフェへの参加を通して，全人的支援の必要性や，伝わりやすいコミュニケーション方法を採用する重要性を感じる．
▶ 学生は，先入観を排除した関わりは相互に有意義であることを実感する．
▶ 学生は，過度な介入を行うのではなく，認知症者が潜在能力を発揮できるように支援を行う重要性を実感しているが，その理由は，主体的な作業参加による認知機能の改善への寄与といった，機能回復への関心が基盤となっている．
▶ 学生は，授業で築かれたイメージよりも能力の高い認知症者との関わりを通して，学内授業で学んだ専門知識によって構築された認知症像との相違を実感する．
▶ 学生は，認知症者との関わりを通して，当事者との関わりが無い中で学習できることの限界や，当事者と直接関わることの重要性を感じる．
▶ 学生は，当事者の生の声が持つ説得力を実感し，以前の自分が抱いていたような認知症に対する偏見をなくしていくために，直接当事者と接することの重要性を感じる．
▶ 学生は，学内の授業においても，当事者と関わる機会の設定により，問題点を中心とした学校教育がもたらす偏見からの脱却ができると考える．
▶ 学生は，認知症カフェに参加する非認知症者から認知症者に向けられた興味・関心の強さから，　非認知症者が，自分が当事者になることへの不安や恐怖を抱いている印象を持つ．

に、当事者の生の声が持つ説得力を実感し、以前の自分が抱いていたような認知症に対する偏見をなくしていくために、直接当事者と接することの重要性を感じた。また学生は、認知症カフェに参加する非認知症者から認知症者に向けられた興味・関心の強さから、非認知症者が、自分が当事者になることへの不安や恐怖を抱いている印象を持った。

考　察

認知症者との接触経験を有する認知症カフェへの参加を経験した学生の変化について、DIで言語データを収集し、SCATを用いて分析を行った。

以下に、ストーリーラインと理論記述を踏まえ、本研究の目的に添って考察するとともに、卒業前教育の改善に向けた示唆を示す。

1．認知症カフェへの参加を通して、認知症者との接触体験をした学生の変化

認知症カフェへの参加は、学生が、認知症者に対して抱いていた「認知症になったら何もわからなくなる」という思い込みから脱却する契機となっていた。授業では、認知症の疫学的な知識にはじまり、中核症状、周辺症状（behavioral and psychological symptoms of dementia：以下. BPSD）に代表される、認知症に特異的な症状については十分な教示を行っている一方で、周囲の関わり方次第でその人らしい生活を継続できる可能性があることや、実際、多くの認知症者は地域で何らかの支援を受けながらその人らしい生活を継続していることについての教示は十分でなかった可能性がある。

学生は、認知症カフェにて、授業で築かれたイメージよりも能力の高い認知症者との関わりを通して、専門知識によって構築された認知症像との相違を実感し、直接当事者と接することの重要性を認識する機会を得ている。これらは緒言で示した中村［4］や棚﨑ら［6］［7］の先行研究と重なるものである。認知症カフェへの参加経験は、学生が偏見や先入観を排除し、中立的態度で当事者と向き会うことの重要性への気づきを与えたと考える。

中村［4］の先行研究では、認知症高齢者の否定的イメージは、低学年においては、マスメディアによる一方向からの情報が影響していると指摘している。また、高学年については、西村ら［12］が、臨床実習で接する認知症高齢者のBPSD出現時に影響を受けることを報告している。田中ら［13］は情緒的な結びつきは学生が認知症高齢者と接することでもたらされるわけではなく、接することの質に大きく左右されるとしている［14］。ここでいう質とは、学生自身が認知症高齢者を「受容できていない」ことに気づき、自身の状態を認識したうえで認知症高齢者に関わり、（学生が）少しでも納得できることを見出す経験をすることで、心理的に隔たりがなくなり、情緒的理解が好意的に変化するというものを指している。

今回、学生は認知症カフェのボランティアとして参加しており、責任を負う立場ではない、「ゆるい関わり」であったことが、肯定的な変化につながった可能性がある。よって、低学年においては、事例担当等の深い関わりよりも、認知症カフェのような関わり方が、学生の認知症者に対する負のイメージを払拭するために効果的である可能性が考えられる。

作業療法士が認知症高齢者を支援するとき、認知症者の個性やその人らしさを尊重し、認知症だけでなく、認知症者を取り巻く環境なども考慮したうえで評価・支援を進めていく。そして認知症者の残存能力（できること）に着目し、残存能力を最大限に引き出し、住み慣れた地域での生活を目指す［15］。学生は、認知症カフェでの経験を通して、認知症症状は不可逆的であるものの、進行の抑制はある程度可能であることや、認知症を抱えながらもよりよく生きることができる可能性を感じていた。また、認知症者に過度な介入を行うのではなく、潜在能力を発揮できるように支援を行う重要性を実感していた。加えて、学生は認知症当事者との直接的な関わりから、当事者の人生を物語的に捉え、認知症者に対する偏ったイ

メージからの脱却をはたし、一個人として尊敬の念をもって捉えようとした結果、認知症者としてではなく、一個人として肯定的に捉える経験をした。これらの経験は、認知症の枠を越え、作業療法の対象者を機能的側面だけで捉えられないことを、学生自身が身をもって知る機会になったと考える。しかし、上記のような実感を得ながらも、学生Ａのストーリーラインで、「主体的な作業への参加を通して、認知機能の改善を図る」と答えるなど、認知症者に対する支援は認知機能自体の改善であるという認識も同居していることが分かった。これは、一般市民のリハビリテーションに対するイメージ［16］とも重なるものであり，学生は，リハビリ＝機能回復というイメージが根強いことが予想できる。

２．認知症教育の改善に向けた示唆

本研究の結果は、教育内容の改善の観点からも示唆を与えるものであると考える。既カリキュラムにおける認知症に関する教示内容は、井村［８］らが先行研究で示した、認知症者に対する肯定的態度に関連するとされる、「関わりの頻度」「関心の程度」「知識量」「イメージ」の中の、「知識量」の部分に偏っていた可能性がある。今回の認知症カフェへの参加体験は、「関わりの頻度」に該当し、それが、「関心の程度」や「イメージ」にも肯定的な影響を与えた可能性がある。したがって、これまで行ってきた「知識量」に該当する授業内容は担保しつつ、認知症者の生活歴や主観的側面など、人となりに関する情報を十分に提供した上で生活上の課題解決に向けた議論を行う時間を設けたり、「作業療法概論」等で、作業への関わりを通して健康と幸福を支援する視点を学んだタイミングで認知症者と関わる機会を設けるなど、シラバス内容や科目同士のつながりを工夫することは、学生の認知症者に対する肯定的態度の涵養に寄与する可能性がある。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、対象者の主観的体験を構造化した質的研究であり、仮説を生成したに留まる点がある。また、対象である３名の学生は、インタビュアーである筆頭著者から認知症に関する授業を受けた学生であった。事前に回答内容によって不利益を被ることはない旨を十分に説明しているものの、回答に影響を与えたことは否定できない。また、学生は、同時期に複数の授業も履修しているため、他の科目によって得た知識や認知症者に対する印象が回答に影響を与えたことも否定できない。今後は、本研究結果を踏まえたシラバスおよびカリキュラムツリーの見直しを行うとともに、学生の認知症や認知症者に対するイメージがどのように変化していくのかについて、縦断的に調査を継続することも必要である。

結　論

認知症カフェへの参加が学生に与える影響について検証した。認知症カフェへの参加による認知症当事者との関わりは、認知症者に対する認知症になったら何もわからなくなるという偏ったイメージの修正に寄与していた。この変化は、学内教育における課題の抽出や、今後の教育改善の示唆へとつながった。

利益相反

本研究の実施において、利益相反関係にある企業、組織、団体等はない。

謝　辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました３名の学生に心より感謝申し上げます。

文　献

［１］総務省統計局：統計トピックス No.126　統計からみた我が国の高齢者.
www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics126.pdf（参照　2021-09-19）

［２］厚生労働省老健局：認知症施策の動向について mhlw.go.jp
https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/shikoku/

chiiki_houkatsu/

［3］木村誠子，片岡万里：看護学生の老年看護学実習前における認知症高齢者イメージの特性－一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージの比較－．高知大学学術研究報告．2006；55：37-43.

［4］中村勝喜，高木初子：看護学生の認知症高齢者に対するイメージと影響要因の文献検討．聖徳大学研究紀要．2015；48：93-99.

［5］Ryan EB, Hummert ML, Boich LH: Communication predicaments of aging: Patronizing behavior toward older adults. J Lang Soc Psychol. 1995；14（1-2）：144-166.

［6］棚﨑由紀子，奥田康子他:看護学生のグループホーム実習における認知症知識及び認知症高齢者イメージの変化とその要因の検討．宇部フロンティア大学看護学ジャーナル．2010；4（1）：51-59.

［7］棚﨑由紀子，光貞美香，田村一恵：グループホーム実習に関連した看護学生の思いと認知症高齢者のイメージ変化．宇部フロンティア大学看護学ジャーナル．2012;5（1）:37-42.

［8］井村亘，渡邊真紀，織田靖史他：理学・作業療法学生の認知症の人に対する肯定的態度に関連する要因．日本認知症ケア学会誌．2020；19（2）：427-436

［9］厚生労働省ホームページ　認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）．http://www.mhlw.go.jp...,2015-city.tama.lg.jp（参照　2021-09-19）

［10］Tong A, Sainsbury P, Craig J：Consolidated criteria for reporting qualitative research（COREQ）：A 32-item checklist for interviews and focus groups. Int J Qual Health Care．2007；19（6）：349-357.

［11］大谷尚：第10章 SCATとは何か－その機能と意義－．大谷尚，質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで．名古屋大学出版会.2019；270-368.

［12］西村美里，大町弥生，中山由美：認知症高齢者に看護学生が抱いた感情．藍野学院紀要．2009；22：12-21.

［13］田中敦子，鳴海喜代子：認知症高齢者への受動的感情とその影響要因に関する縦断的調査．埼玉県立大学短期大学紀要．2006；7：59-66.

［14］鳴海喜代子，永江美千代，土屋陽子，正木治恵，坂田直美，池田由紀，野口美和子：看護学生が痴呆老人を理解する過程と教師の援助．看護展望．1986；11（10）：59-65.

［15］日本作業療法士協会：認知症の方への作業療法．www.jaot.or.jp/ot_alzheimer/（参照　2021-09-27）

［16］澤田辰徳，建木健，藤田さより，小川真寛：一般市民における「作業療法」,「リハビリテーション」についての認知度調査．作業療法．2011；30（2）：167-178.